曹洞俳壇

選・坊城　俊樹

豊穣を果して眠る冬田かな

島根県　**今岡　式枝**

評　昨年の秋の収穫は豊穣であった。精魂尽き果てたのであろうか。刈り跡ばかりとなった冬田はただ眠るばかりである。この句の余韻は冬田を擬人化し、それにたいする感謝の気持ちに満ちあふれているところにある。

湯タンポの温い記憶に母が居る

茨城県　**藤井　一夫**

評　母の記憶とは幼いころの想い出。風邪をひいて湯タンポを入れてもらって唄をうたってくれた甘く切ない記憶。あまり熱いと幼子は耐えられない。だから湯タンポがちょっと温くなった時の記憶が残っているのだろう。

◆木枯を体斜めに通しやる　三重県　西村　廣視

◆舞ふ鬼女の大足を見る里神楽　山口県　御江　恭子

◆竜天に昇りしあとの草の影　福島県　佐藤　忠

◆日面にたわわに高く實南天　宮城県　鎌田登喜子

◆城の灯も病棟の灯もクリスマス　愛媛県　井上　征郎

◆しんしんと寝耳を襲ふ霜夜かな　岩手県　関合　新一

◆蛸足の配線冬に入りにけり　東京都　友野　瞳

◆何か罪犯した顔や冬鴉　島根県　藤江　尭

◆鳶の輪に嵌まり棒立ち冬岬　千葉県　鈴木　英子

◆美しき手毬つく子や草の家　山口県　中井　清子

＊選者吟

神慮（しんりょ）いま大群衆の初みくじ

俊　樹

＊作句小見

正月は瞬く間に過ぎ去ってしまった。大寺などに集まった群衆は神籤（みくじ）の結果に一喜一憂するのだが、それもまた神慮の思し召しにあるのだという句。はたして小生は中吉でありましたので、戌年は平凡なる幸を求めんとす。

（編集部より）村松先生のご都合により、しばらくの間、坊城先生に選者をご担当いただきます。

曹洞歌壇

選・長澤　ちづ

頬被りや長靴おうなも混じり待つ雪に明るむ臨時医務室　岩手県　宍戸さとる

評　この冬は記録的な大雪。高齢の方も雪下ろしに奮闘されている映像を目にすると雪国の暮らしの大変さを想う。この歌では「臨時医務室」がそれを具体的に物語る。しかし歌の調子はどこまでも明るく人々の生活力の強さを感じさせる。

秋深し藍青の空を真ふたつに開くが如く白鷺の飛ぶ　熊本県　島田　佳可

評　二句三句の「空を真ふたつに開く」の表現が秋の透明感を力強く伝える。「如く」と言わずに「開く」と言い切ったほうが鮮明な印象で読者にも伝わるのではないだろうか。

◆凍てる朝鉄筋を組む人夫らの吐く息白く勢いをもつ　北海道　吉田　洋子

◆枯れしものなべて枯れたる身軽さに清清として年改まる　奈良県　横井　正子

◆この音が雪降る音か深々と静寂こそが雪の音なり　東京都　長谷川　瞳

◆大きい弧小さい弧描き泳ぐ鴨一羽潜れば残らず潜る　東京都　野村　信廣

◆過ぎたるは何とかだよ言はれゐる　さうよ幸せ過ぎても不安　島根県　横山　稾吾

◆黄金の銀杏の大木陽を受けてお寺の屋根にさざ波のごと　岩手県　柴田　幸栄

◆朝夕に海の面見て暮らす人舟屋の女将頬ふっくらと　秋田県　小松　紀子

◆年賀状を読めば浮かびくる友の顔高校生のままのそのかほ　福岡県　三吉　誠

◆「さようなら」南相馬の一本松津波被害に枯れて伐られる　福島県　大槻　弘

◆口だけで済めば良かった武勇伝昔のことをややデフォルメす　青森県　中田　瑞穂

＊選者詠

とても無理と手渡されたるジャムの壜何の弾みかわが掌に開きぬ　ちづ

＊作歌小見

顔も意味する面を海の面から女将の頬につなげる小松さんの一首には物語を感じます。野村さんや三吉さんのシンプルな表現の爽やかさにも惹かれました。皆さまの歌には季節感と生活感の実感があり、歌の力をしみじみ感じます。

大本山永平寺

仏恩（ぶつおん）

永平寺では、朝と昼の食事の際に、仏恩を想起し、「仏生（ぶつしょう）カビラ　成道（じょうどう）マカダ　説法ハラナ　入滅クチラ」と、お釈迦さまの生誕・成道・初説法・入滅の地名をお唱えいたします。

「仏恩」を想起するとは、お釈迦さまや、そのみ教えをお伝えくださった代々のお祖師さま方のお陰があってこそで、今まさに仏弟子として食事をいただき、生活することが出来ていると観じることであります。そう思えば、及ばずながらも報恩の修行をせずにはいられない思いがいたします。

このお唱えを通して、私たち仏弟子は皆、仏祖の恩に包まれ護られて生きていることを深く顧みるのです。

「伝えこし　法の水瓶水浄く　洩らさじとおもう　濁さじとおもう」という古人の句があります。

この句は、お釈迦さまより代々に伝わる仏の道を、及ばずながらも、濁さずに修行していきたいと願う句でありましょう。

毎日の食事の度に、仏祖の恩を観じ、心を励ましているものでございます。

さて、永平寺では、四月二十二日から二十九日までの八日間、仏祖の恩に報いる「報恩授戒会（じゅかいえ）（仏弟子となり仏の生き方を習い誓う式）」を修行いたします。授戒会では、共に仏祖の恩に報じることが出来るように、それぞれの役目において真心を込め、一心に修行いたします。食事を司る典座（てんぞ）寮でも、活き活きと報恩修行が営まれております。

大本山永平寺／０７７６-６３-３１０２

大本山總持寺

「南無釈迦牟尼仏」とお唱えしながらの巡堂

報恩大授戒会

「悟り（宗教）とは、如何なる場合にも平気に（安心して）死ぬことを教えることだと思っていたがそれは間違いで、悟りとは、どんな場合にでも安心して生きる道を教えるものであった」

これは正岡子規の『病床（牀）六尺』にある言葉です。この「安心して生きる道」を教えてくれるのが「授戒会」であります。

總持寺では四月十日から十六日の一週間、授戒会（報恩大授戒会と称します）が行われます。

戒は一般に「いましめ」と読み、注意・訓戒・禁止などを指しますが、仏教では「習慣」という意味もあります。戒は香に、習慣は薫りにたとえられます。香を焚き衣服に薫じますと、薫りとなって長く服に残ります。これを「薫習」といいます。

授戒会では、戒弟の方々は戒の意義を学び、坐禅や説戒・礼拝・読経など様々な修行をします。

そして最終日十六日の夜には、釈尊より脈々と相承された尊い戒法を、禅師さまから直接授けていただくのです。

報恩大授戒会は、檀信徒の皆さまが正しい教えを守り伝えることを自覚する儀式でもあります。読者の皆さまにも是非ご参加をお勧めします。詳細は總持寺尚事寮までお問い合わせください。

大本山總持寺尚事寮／０４５-５８１-６３４２